

論文

イラン、マルヴ・ダシュトにおける新石器文化の様相 —タル・イ・ジャリ A 遺跡石器群の分析を中心に—

中村 真衣子

タル・イ・ジャリ A 遺跡は、イラン南西部のファールス地方、マルヴ・ダシュト(マルヴ平原)に位置する土器新石器時代遺跡である。本稿はこの遺跡から出土した2,500点余りの石器群の再分析に焦点を当てたものである。

石器製作には9種類の石材が利用されており、分析は、これらの石材を大きくI群(放散虫チャート、珪質ノジュール①、珪質頁岩、珪質石灰岩、メノウ、ジャスパー)、II群(珪質ノジュール②)、III群(黒曜石)に分けて行われた。

I群の石材の使用のされ方には大きな差はないが、明らかにこの集落の住民は良質のチャートとノジュールを好んで使用していた傾向が見られる。石核と原礫面付き剥片類の存在は石器製作がこの遺跡内で実行されていたことを示

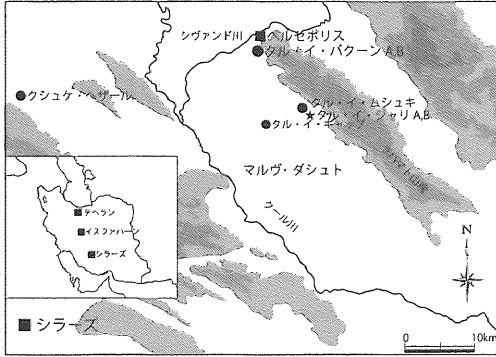
す。さらに、周辺遺跡では報告されていない彫刀面打撃技法の使用が観察された。狩猟道具としての幾何学形細石器は少ないが、収穫具としての鎌刃は多数存在し、作り変えや転用も頻繁に行われていた。II群は大型の道具類と多数の不定形の剥片類から成る。この群の石器が計画的に製作されたものかどうかは疑わしいが、原礫面を持った多くの未加工剥片の存在は、それらがこの遺跡内で生産されたことを示している。一方、南東アナトリアなどから搬入された緑色や漆黒色の黒曜石製石核と石核調整剥片の存在は、遺跡内における加工を暗示するが、穿孔器の形態はI群のものと同様相を異にする。これらは、原石、石核、製品の状態で持ち込まれた可能性を示している。

I. はじめに

1. タル・イ・ジャリ A 遺跡の概要

マルヴ・ダシュト(Marv Dasht: マルヴ平原)の東北側に位置するクー・イ・ラハマト(Küh-e Rahmat: ラハマト山塊)の麓にはかつて、アケメネス朝ペルシャの王都、ペルセポリスが営まれた。今回取り上げるタル・イ・ジャリ(Tall-e Jari A)遺跡はこのペルセポリス遺跡の南東およそ13kmに位置し、周囲を同じく土器新石器時代遺跡であるタル・イ・ムシュキ(Tall-e Mushki)遺跡やタル・イ・ジャリ B (Tall-e Jari B)遺跡、そして少し時代の下るタル・イ・ギャップ(Tall-e Gap)遺跡などで囲まれている(第1図)。

タル・イ・ジャリ A 遺跡は直径およそ100m、現在の地表面より2.5m高い円状の丘である。1950年代初頭にファンデン・ベルヘ(Vanden Berghe)が行ったマルヴ・ダシュトの遺跡分布調査により発見され、試掘調査が行われた(Vanden Berghe 1952)。1956年には第1次東京大学イラク・イラン遺跡調査団がイラン先史時代遺跡の発掘調査を開始し、1961年、江上波夫を中心とする第2次東京大学イラク・イラン遺跡調査団がタル・イ・ジャリ A 遺跡の発掘に着手した。この年の発掘では最下層まで達することができなかったが、後を受けた増田精一率いる東京



第1図 マルヴ・ダシュトと関連遺跡

教育大学イラン先史遺跡調査団が1971年に再び発掘を行い、地山上にある第3層までを明らかにした。この2回にわたる発掘を総括する概報が、1977年に発表されている(Egami et al. 1977)。それによると、堆積は3つの文化層に区分され、その主な根拠は出土土器の特徴と他地域の土器との比較に基づいている。包含遺物は多彩であり、海産の貝や黒曜石、遠くメソポタミア地域との類似性示す土器の存在は、紀元前6～5千年

紀にかけての初期農耕集落であったタル・イ・ジャリ A 遺跡居住者の広い交易関係を示唆するものであるとされた。しかしこの概報が発表された後、詳細な報告書が刊行されていないこと、そもそもイラン南西部とメソポタミア地域の土器を比較して時代を比定するのは実際的でないことから、他の研究者達によって疑問が提示されてきた(堀・前田 1984, 西秋 2003 など)。

2. 研究の目的

近年、イランでの国内事情の変化に伴い、マルヴ・ダシュト地域における新石器時代遺跡の調査は国内外で再び活発化しており(Alizadeh et al. 2006, 西秋 2006 など)、筑波大学が所有するタル・イ・ジャリ A 遺跡の膨大な資料も広く研究者に公開され、この地域に関する研究の更なる発展に貢献することが望まれる。本論文の目的は、タル・イ・ジャリ A 遺跡の石器群を改めて分析し直し、考察を加え、新たな見解を提示することにある。さらに、周辺に立地し、ほぼ同時代のものと考えられている諸遺跡の石器群との比較を通じて、タル・イ・ジャリ A 遺跡の性格を浮き彫りにするとともに、他地域との交易関係について言及したい。

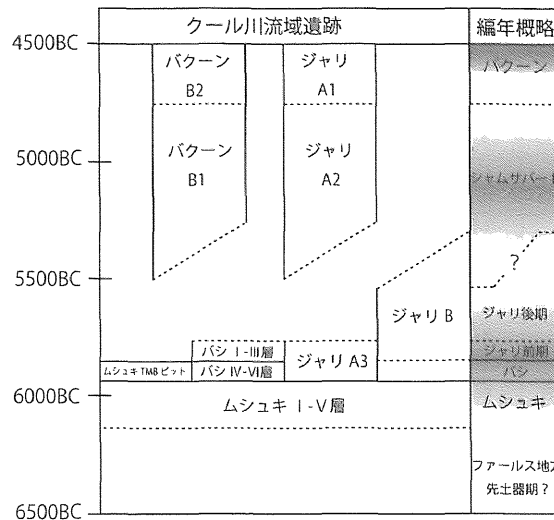
なお、石器群を出土層位に基づいて再分析することが理想的ではあるが、はっきりと層が判明するものはおよそ半数である。この状態でさらに表土、第1層、第2層、第3層に分けて分析する、つまり標本数が不十分なままで無理に層ごとの傾向を出す意義は低く、各層間で大きな差が出ないであろうことは層位が判明している少ない証拠からも明らかと思われた。従って、この石器群はタル・イ・ジャリ A 遺跡の一括資料として扱うこととする。

II. タル・イ・ジャリ A 遺跡出土石器群の分析

1. 石材

タル・イ・ジャリ A 遺跡から出土した打製石器は全部で2,542点を数える。内12点は黒曜石である。この資料に初めて触れる際にまず目を引くのがその多彩な石材の色である。緑、茶色が多数を占めるが、その他に灰、赤、黒、青、黄、白色のものや、赤一緑、青一黄色と二色が混在しているもの、また石英のように透明なものやざらざらとした岩のような質感を持つものなど、実に多様である。

イラン、マルヴ・ダシュトにおける新石器文化の様相



第2図 Weeksらによる暫定的な比較年代(Weeks et al. 2006 : Fig. 12 を改変)

ところで、原産地以外のどこの遺跡の石器群でも黒曜石が「フリント」製の石器と分けて扱われるのは、黒曜石が決まった場所でしか得ることができず、それが存在すること自体が他地域との接触や交易を示すからである。黒曜石はガラス質で剥離に非常に適しているため、石器の材料として積極的に使われ、また広く交換された。メソポタミアやイラン各地の新石器時代遺跡からたびたび出土する緑色の黒曜石は、東アナトリア、タウルス山中のビンギョル(Bingöl)と、ヴァン(Van)湖北西岸のネムルート・ダー (Nemrut Dağ)でのみ産出することが確かめられている(Renfrew et al. 1968, Fornaseri et al. 1975-77, Chataigner et al. 1998)。また肉眼では判定できなくとも、黒曜石は産地によって含有される元素に差異があるため、蛍光X線分析法(XRF)や高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP)などによる化学組成の分析値同士を比較すれば、おおよその産地を同定することができることが知られる(望月 1981 など)。

1977年に発表されたタル・イ・ジャリA遺跡の概報では、打製石器群をフリント、珪質凝灰岩と判断されている粗質の石、黒曜石に分けて記述を行っている。石材獲得方法と道具製作技術との差異を反映した妥当な分類と思われる。しかし特殊な性質を持つがゆえに黒曜石が特別視されることは良いとしても、黒曜石以外を「フリント」、「粗質フリント」でひとくくりにしてしまえば、石器利用方法の細かな差異を見逃すことになりはしないだろうか。石器を現実の生活道具として製作していた新石器時代人の石材へのこだわりはおそらく我々が想像する以上であったろうし、当時、その地で、生まれ生活していた人々特有の知識や直感も石材選択に影響しているはずである。また実際に色や質感の明らかな相違から、石材の細分は可能なのである。「石器作りに適した石」という程度の意味しか持たない「フリント」という言葉をなるべく使わずに、石器群の詳細な特徴をつかむために、石材の岩石学的な分類が必要であった。観察は肉眼と10倍のルーペを用いて行った。その結果、タル・イ・ジャリA遺跡で利用されていた石材は以下のとおりに分類することができた。石材の分類に際しては、筑波大学大学院生命

第1表 ジャリ A 遺跡石器群組成

器種	石材								総数	
	放散虫 チャート	珪質 頁岩	珪質 石灰岩	珪質 ノジュール①	珪質 ノジュール②	メノウ	ジャスパー	黒曜石		
石核・ 調整剥片・ 破片・ 道具素材	石核素材	3			1				4	
	石核	71		1	1		1	2	3	79
	石核破片	16			1					17
	剥片	794	7	26	32	106	14	2	2	983
	トサカ状稜付石刃	22			2	1			2	27
	打面再生剥片	22			1		1			24
	作業面再生剥片	5								5
	内反剥片	3								3
	石刃	644	1	6	31	8	6	2	2	700
	内反剥離石刃	10			1		1		1	13
ラテラルブレード	4								4	
彫器削片	4								4	
道具類	リタッチドブレード	268	4		35	1		3	1	312
	鎌刃	176	1		29			1		207
	截頂石刃	17								17
	彫器	18		1	2					21
	抉入石刃	22			3					25
	穿孔器	29	1		1					31
	搔器	3			1	1			1	6
	幾何形細石器	4			1					5
	リタッチドフレイク	44			7	4				48
総数	2179	14	34	149	121	23	10	12	2542	
総重量(g)	6142.3	48.7	208.7	546.4	1420.5	52.7	57	15.2	8491.5	

環境科学研究科久田健一郎教授の助言を得た。

- a. 放散虫チャート¹⁾①：放散虫の殻が見えるもの。赤～茶褐色系，オリーブ～薄緑色系が多数。青，黄，黒色も。割れ口が鋭い。
- b. 放散虫チャート②：放散虫の殻が見えないもの。色はaと同様。
- c. 珪質頁岩：灰色や灰色がかった赤色系など。
- d. 珪質石灰岩：灰～黒色系。割れ面が粗い。
- e. 珪質ノジュール²⁾①：濁った黄色～はちみつ色などの黄褐色系。珪質度が高く均質で割れ口が鋭い。
- f. 珪質ノジュール②：eの生成初期段階に当るもので，粗質。灰色～黄色がかった灰色。
- g. メノウ(石英岩)：透明～乳白色。赤や黒色の部分や不純物が見える場合が多い。
- h. ジャスパー(変質岩)：鮮やかな赤や黄色で光沢がある。
- i. 黒曜石：透過光で緑や灰色に見える黒色。不透明の漆黒色もある。

概報で珪質凝灰岩と判断されている粗質の石は，おそらく上記のf.珪質ノジュール②にあたる。これは質も道具への使われ方も明らかに他の石材と異なっている。このf.珪質ノジュール②とi.黒曜石以外をまとめて「フリント」と呼ぶことは避けたいが，結論からいえばこの2種の石以外は利用している製作技術で異なった所はなく，また黒曜石のように明らかな遠方からの搬入品であるわけでもない。そこで，本稿ではa～e，g～hをI群，fをII群，iをIII群とす

るにとどめて石器群の分析を行う(第1表)。放散虫チャート②は放散虫の化石が見えなくなるまで珪質化が進んだ放散虫チャート①であると言い換えることができるが、両者に大きな質の違いは認められないので、放散虫チャートと一括りにしている。「フリント」をI群と呼び変えただけだというご指摘を受けそうだが、I群の細分は将来各石材の産地が特定されたり、地域ごとや時代ごとの利用の差を証明する資料が発見された場合には有効となってこよう。次節以降で各石材がどのように使い分けられているかを示す。

2. 石器組成

(1) I群の石器組成

I群のタイプリストを第2表で表した。鎌刃は使用痕、つまり鎌刃光沢の付着により判断されている道具である。石刃や剥片は、実際に使用痕が付いているものもあるが、道具というより道具素材の意味合いが強いと考え、あえて機能に基づいた分類を行っていない。

ちなみにこの石器群には、機能を2つ以上持つ石器、いわゆる複合石器が少なからず存在する。通例器種の算定に当たっては、複合石器(composite tools)という項目を設けるか、その機能部を別々に数える(旧石器文化談話会編 2000)。しかし、たとえば彫刀面と連続リタッチが同時に存在する場合、彫器とリタッチドブレイドが1点ずつとすると、確かに存在しうる道具すべてを数えたことになるが、両方の機能を同時に持つという特徴を示せない。かといって彫器カリタッチドブレイドのどちらかにするのは恣意的な算定になってしまうし、どちらを高次の属性とするかも決めかねる。また、鎌刃光沢と連続リタッチを同時に持つものは往々にして鎌刃の分類に入れられるが、鎌刃をリタッチドブレイドに作り変えて別の用途に使っていた可能性も否めない。このことを念頭において、タイプリストでは、便宜的にある器種に分類しつつなるべくその特性を表す方法を採用し、後述の各器種に関する説明には複合石器という分類を設けないが、各器種内にある様々な変種について可能な限り言及したい。

石核素材 core blanks

4点のみだが、石核を形成する前段階の粗割がなされている途中で放棄されたものと見られる石塊が存在する。剥片が数回取られているが、原礫面を多く残す。最大径5cmほどであり、素材の礫自体があまり大きくなかったことが窺える。初めから小形の石核を作ろうとした例であろう。

石核 cores

①多面体石核 polyhedric cores (第3図:1)

不特定多数の打面を持つ剥片石核で、直接打撃によって全面を剥離されている。その都度剥片を取りやすい面から剥離するために打面を転移させていったようで、ほぼ球形のものからかなりいびつな多面体のものまで様々である。

②両設打面石核 opposed-platform cores (第3図:2)

上下からの剥離痕を持つ、多くが角柱形の石核であるが、レヴァント新石器時代の典型的な「ナヴィフォーム石核」のようなものとは明らかに異なる。上下双方からの剥離といても、

第2表 I群の素材・道具類組成

	器種	加工状態			石材					総数	
		原礫面	截断	彫刀面打壁	放射虫チャート	珪質頁岩	珪質石灰岩	珪質ノジュール①	メノウ		ジャスパー
道具素材 ～ 道具類	石刃	有	/	/	69		1	5	2	1	690
		有			575	1	5	26	4	1	
	トサカ伏接付石刃	有	-	-	6						24
		有			3						
	内反剥離石刃	有	-	-	13			2			12
		有			2			1	1		
	ラテラルブレイド	有	-	-	8						4
		有			1						
	リタッチドブレイド	有	有	-	1			7			310
		有	有	有	22						
		有	有	有	2						
		有	有	有	22			2			
	鎌刃	有	有	-	8	1					75
		有	有	-	213	3		26		3	
		有	有	-	7			3			
	リタッチ入り鎌刃	有	有	-	5						132
		有	有	有	2			1			
		有	有	有	50			6		1	
		有	有	有	3			3			
	截頂石刃	有	有	-	3						17
		有	有	有	4			1			
	彫器	有	有	有	2			1			21
		有	有	有	17		1	1			
	抉入石刃	有	有	-	2						25
		有	有	-	2						
		有	有	-	1						
穿孔器	有	有	-	17			3			31	
	有	有	-	3							
	有	有	-	1							
	有	有	有	4							
掻器	有	有	-	21	1		1			4	
	有	有	有	1				1			
幾何形細石器	有	有	-	2						5	
リタッチドフレイク	有	/	/	4			1			51	
	有			9			2				
				1						1401	
				34			5				
					1261	7	7	113	7	6	

明らかに一方の打面からの剥離に力点が置かれているため、もう一方からの剥離は補助的な、あるいは修正の役割を持つものという性格が強い。基本的に押圧技法による石刃剥離を目的としているものと考えられるが、偶発的な剥片剥離もしばしば起こったようである。

③単設打面石核 single-platform cores (第3図:3-4)

押圧剥離、もしくは直接打撃によって円・角錐形石核の錐面の全周、あるいは半周から石刃・剥片が連続剥離された石核である。全周を押圧技法で剥離されていわゆる砲弾形を呈する石核は2点のみである(第3図:3)。打面調整が注意深く行われ、両側縁が平行な石刃の剥離痕が規則的に残り、先端が内側に向かって「し」の字に曲がる典型的な押圧剥離石核でその形を留めているものは1点しか確認できない。最終的な剥離物が直接打撃による剥片である石核が多く、いびつな角錐形が目立つものの、石刃をある程度押圧剥離で剥離した後に直接打撃の剥片剥離

に切り替えていた可能性も考えてよいだろう。石核として残っているものは概して3cm前後の小形のものだが、10cmを超える石刃が存在することから、最大径10cm以上の礫が利用されることもあったのは確実である。背面を調整して平らにしたり、半周剥離の段階でやめたりするものが多く、ほぼ半周にあたる背面が原礫面のままのものもある。中には、原礫面の平らな、あるいは錐形の形状をそのまま利用したものもあり(第3図:3)、原石は質だけでなくその形も選択の基準であったことを窺わせる。遠端部に原礫面を残す石刃製品が多いことを併せて考えても、この遺跡では石器製作に比較的小型の礫を用いる傾向にあり、初めから原礫面をすべて除去せずに石核からの剥離作業を遂行していたようである。

石核調整剥片 core trimming pieces

①トサカ状稜付き石刃 crested blades (第3図:6)

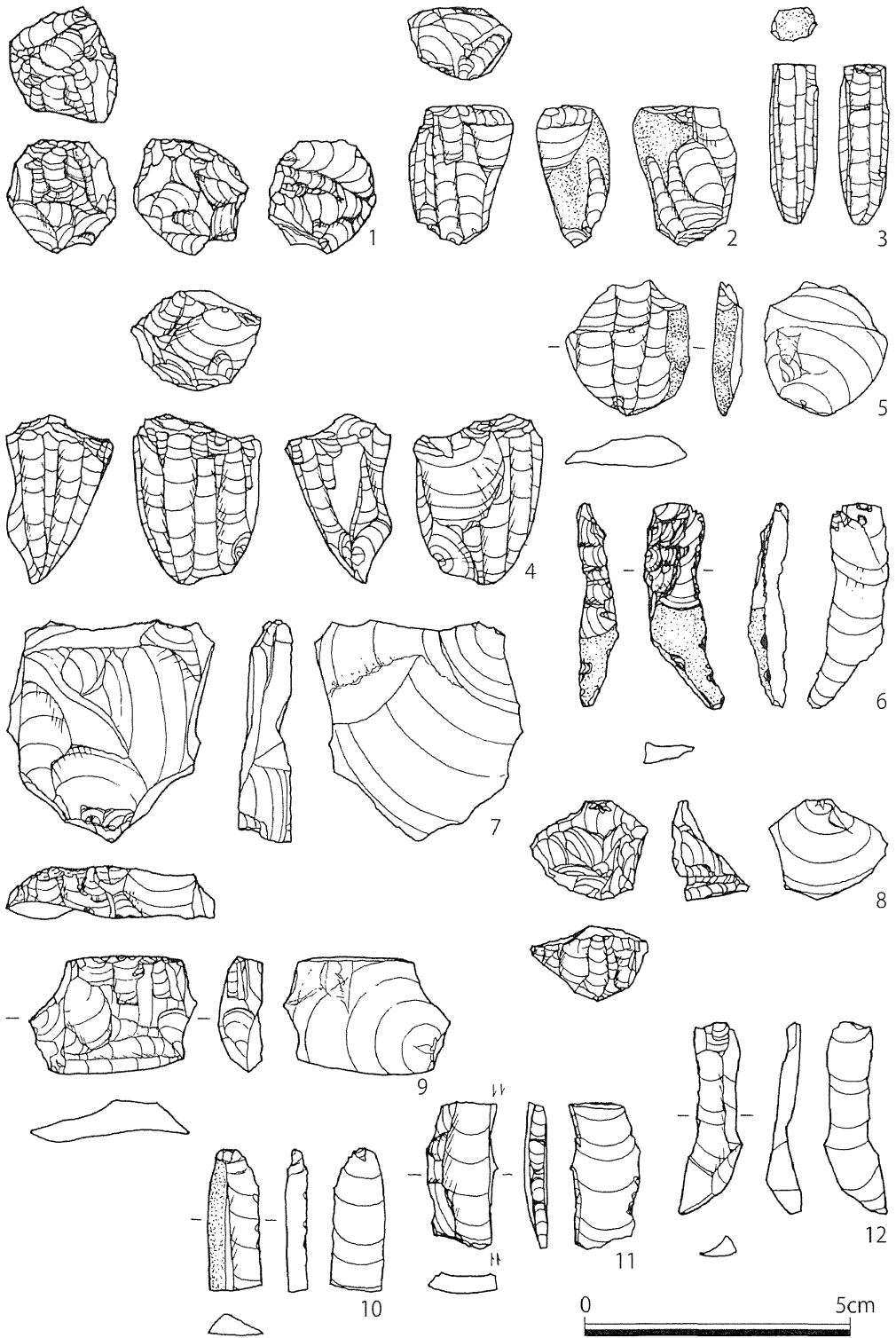
幅広で厚みのあるものが多いが、どのタイプの石核から剥離されたかはつきりとは分からない。大きく分けて、稜を挟んで両面に横方向の剥離痕を持つものと、片方に通常の石刃剥離痕を持ち、もう片方にその剥離面を打面とした横方向の剥離痕を持つものがある。後者の方が圧倒的に多い。一般にトサカ状稜付き石刃は石核の準備が終了した後第一に剥離される石刃と認識されるが、後者のような例は剥離作業中の再調整を示すものである。また、刃部に彫刀面をもつもの、連続リタッチを持つものがあることから、道具素材として認識されていたようである。石核の説明でも述べたように、この遺跡では原礫面を残す石核が非常に多い。原礫面を持った片面調整のトサカ状稜付き石刃の存在は、原礫面の除去をしながら剥離が進行していったことを想像させる。さらに、背面が全て原礫面のリタッチドブレイドも存在することから、石刃剥離に適した自然稜を持つ原石から第一石刃が剥がされる場合もあったようだ。

②打面再生剥片 core rejuvenation flakes (第3図:7-8)

コアタブレット(core tablets)とも言われる。石刃の連続剥離がある程度進んだ段階で、打面を再生させることを意図して石核の横方向からほぼ一撃で剥離される剥片である。直接打撃による石刃剥離を行っていた石核からとられた大型のものから、押圧によって石刃剥離を行っていた円錐形石核からとられた小さく丸いものまである。直径は小さいもので1cm程、大きいもので5cm前後あるので、石刃、剥片剥離が進行する過程で適宜剥がされていたことが分かる。しばしば新しく現れる打面が石核の長軸に対し斜めになるように斜め上方から打撃を加えているものがあるので、続く石刃剥離を容易にするために新打面と作業面が成す角を80~90度にするという意図が働いていたことは明らかである。その際、剥がされたコアタブレットには薄い部分と厚い部分ができるが、この薄い部分に使用痕がついていたり、縁辺にリタッチが施されていたりする例もある。おそらく、スクレイパーとして流用されていたのだろう。

③作業面再生剥片 working-face rejuvenation flakes (第3図:5,9)

4点のみ、並んだ石刃剥離痕を持つやや厚みのある剥片が存在する。すべて単設打面石核由来のものと思われる。広義の打面再生剥片に含まれると考えられるものの、作業面再生剥片を剥がされた石核では必ずしもこの剥片の剥離面が新しい打面になるとは限らないため、常に打面を更新するコアタブレットと区別する必要を感じ、この名称を新たに設けた。石刃の剥離



第3図タル・イ・ジャリ A 遺跡の1群石器(1)

方向とは直交する角度から一撃で剥離したものや、作業面にできた蝶番剥離(ヒンジ・フラクチャー)痕を除去するために、石核の末端部から逆方向の剥離を施して剥がされたものなどがある。

④内反剥片 plunging flakes

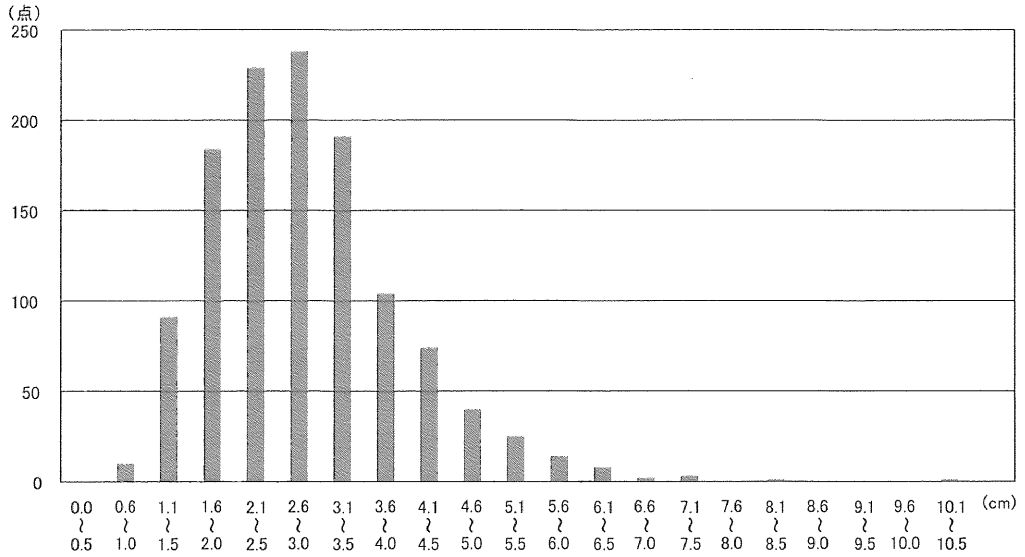
ウートラパッセによって石核の底を伴う剥片。偶発的なものとも考えられるが、意図的に打点を奥に設定して加える力の向きを調整することでも剥離できるため、ある種の作業面再生の意味を持っていたのではないかと考え、石核調整剥片に分類した。

道具類 tools

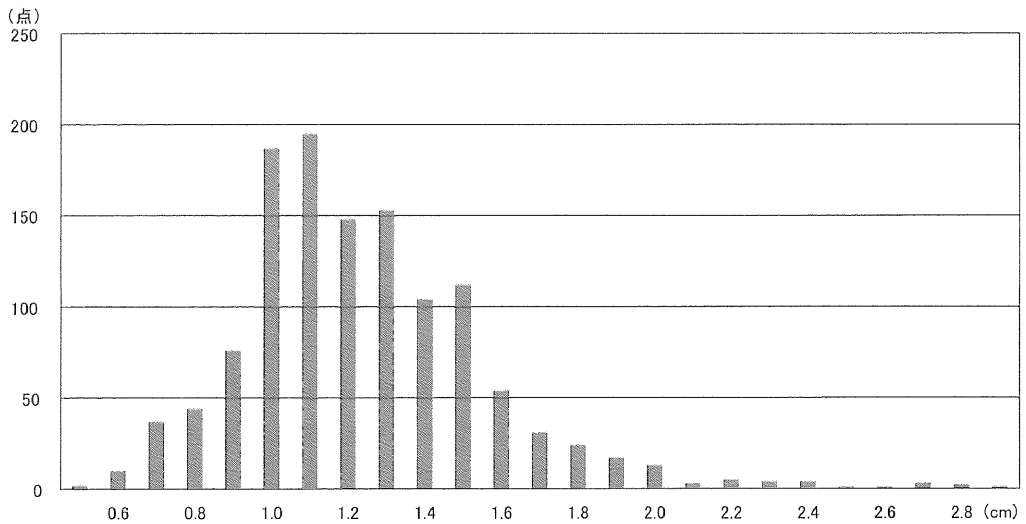
石刃を基にしたそれぞれの道具類全点に占める原礫面つき道具類の数は、およそ5～10%前後である。原礫面を残す石刃類の多くは、その背面の稜線を境にして丁度縦半分に原礫面を持つもの(第3図:10)、どちらかの側縁に沿って幅の狭い原礫面を持つものである。これらは石核からの石刃剥離進行方向の常に一番端からはがされていった素材から製作されている。また、遠端部のごくわずかな範囲にのみ原礫面を残すものもあって、石核底部の原礫面が取り除かれずに剥離がすすめられることがしばしばあったことを示している。片側縁部から片端部にかけてL字形に細い原礫面が続いている石刃の存在もこれを証明している。背面の稜上に沿って原礫面が残る2例もあるが、可能性としては剥離が全周を回り終わる時に剥がされた一番後の石刃ということが考えられるだろう。ところで、原礫面のある側にも使用痕と思われる連続した微細剥離痕が付いていることがある。おそらく原礫面のある刃部の方が原礫面のない刃部に比べて強度があり、リタッチをわざわざ加えなくても有用な道具として使えたことを物語っている。

①石刃 blades/snapping blades (第3図:10)

石刃石器群の中心要素である。折り取りもリタッチも施されずに使用痕のみを残す石刃も存在するが、5分の4程は一端か両端を折り取られている。折り取りがなされていない中で最長の石刃類は10cm余りであることと、出土している石核素材が最大径およそ5cmであること、そして石刃類は3cm前後のものが最も多いことから(第4図)、通常石刃は石核から剥離された後2つか3つに分割されたものと思われる。第6図から、基端部か遠端部のどちらかを折り取られた片端折り取り石刃と、両端折り取り石刃はほぼ2:1から3:2であることが分かる。単純に考えて、石刃を2つに分割した場合は片端折り取り石刃が2つできる。3つに分割した場合は片端折り取り石刃2に対して両端折り取り石刃は1、4つに分割した場合は2:2となる。つまり片端折り取り石刃が両端折り取り石刃の1.5から2倍であるという事実は、石刃が2つから3つに分割されたことを裏付けているといえる。分割は1、2回が妥当であるというのは当然と言えば当然だが、第7図はまた違った証拠を示している。各片端折り取り石刃類の内訳は、石刃の遠端部と基端部が半々にならず、ほぼ1:4となる。これはおそらく遠端部が特に押圧剥離によって内反したり都合の悪い形になってしまったりして、取り除かれることが多かったためだろう。不要部分となった遠端部はまとめられ、少なくとも発掘区の外側に廃棄されたものと思われる。そうなると本来は片端折り取り石刃がより多く存在したはずで、石刃は



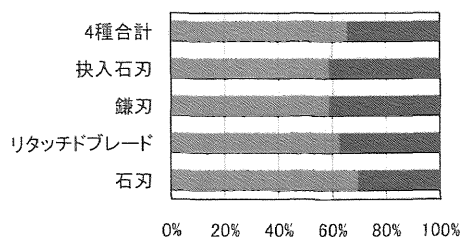
第4図 石刃類の長さの分布



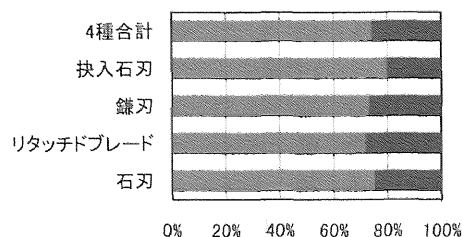
第5図 石刃類の幅の分布

2つに分割されることが主流であったと結論付けられる。全てそう厚いものではないため、分割方法はほとんど手などによる折り取りであったはずである。しかし、意図的な整形であるらしい尖った端部を持つ石刃は、直接打撃による分割も併用されていたことを示している。組み合わせ式の鎌刃用とするには規格性が求められたのだろうし、彫器、穿孔器など他の道具類に加工するにも彫刀面打撃のための打面を作る、道具の機能を極力制限しないために湾曲していない部分を抽出するなどの必要性があったはずである。すなわち折り取りは単に石刃の数を増

イラン、マルヴ・ダシュトにおける新石器文化の様相



第6図 折り取り石刃類の端部比較



第7図 片端部折り取り状況の内訳

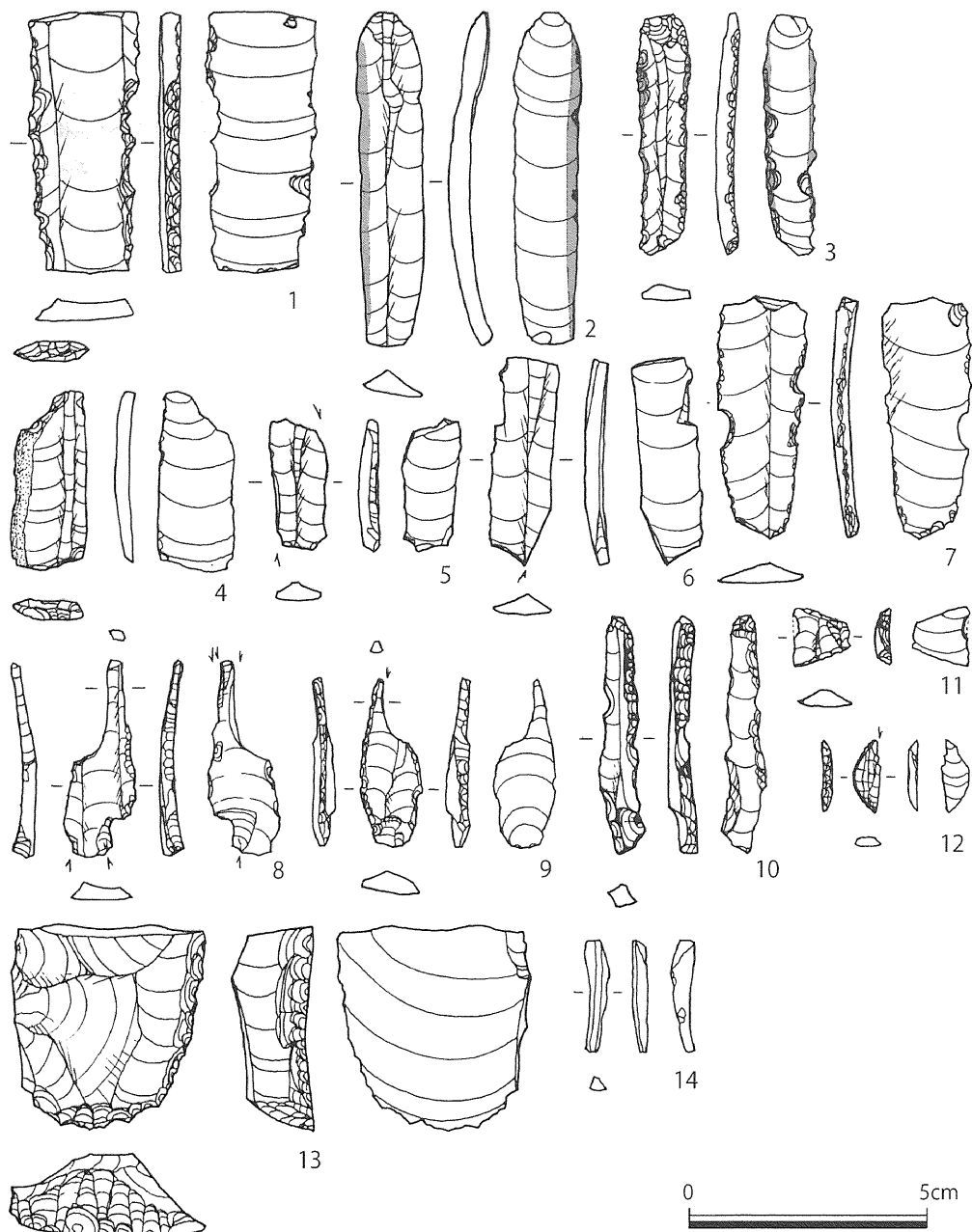
やすためだけのものではなく、道具素材としての下準備であったと言えよう。

②リタッチドブレイド retouched blades (第8図:1)

上記(1)の石刃を用い、側縁部に連続リタッチを施したものの。原礫面が残る側縁にもリタッチが施されたり、使用痕が見られたりする場合があるので、原礫面は道具として使用する際に障害になるとは考えられていなかったことを窺わせる。リタッチは急角度や鱗状といったはつきり目立つものから、非常に細かなものまで程度に差があり、そこに働いていた意図は多少でも異なっていたと考えられる。簡単な背潰しと刃部再生では当然リタッチの加え方が違ってくるだろうし、何よりもリタッチの持つ意味が異なる。連続リタッチが施されただけのいわば純粋なリタッチドブレイドは310点存在するのに対し、鎌刃に現れたり彫刀面を持つ石刃に共在したりする複合リタッチドブレイドは149点である。前者は概して片側か両側の背面にリタッチが施され、範囲が限られていたりリタッチそのものが微細であったりする。また、交互に錯向リタッチを施すもの、連続リタッチによって全体を木の葉形、くびれ形、S字形に成形するといった珍しい例もある。後者も腹面からリタッチを加えられる点では同じだが、やや広めで急角度の傾向にあり、しばしば両面リタッチも行われる。第8図の1などは鋸齒縁石器(denticulate)と呼んでも良いかもしれないが、リタッチドブレイドや挟入石刃と区別が曖昧になってしまうものが少なからず存在するため、敢えて鋸齒縁石器という分類は設けない。この石器群では石器の再利用や作り変えが目立つが、その際にリタッチは欠かせない工程であり、それが石刃に次いで2番目に多い道具類となって表れているのであろう。

③鎌刃 sickle elements (第8図:2-3)

刃部に沿って鏡のような光沢、いわゆる鎌刃光沢を持つものだけをこの分類に入れた。器面全体にかすかな光沢を持つものを排除したことになるが、それは光沢が必ずしもイネ科の植物を刈り取る際にのみ付着するものではないからである。1つの石刃を長く繰り返し使ったために摩耗して、もともと珪質度の高い石材が光沢を帯びることは多々あったと考えられる。形状から判断できる鎌刃を含めなかったにもかかわらず、この定義での鎌刃だけで石刃石器全体の15%近くを占めることから、鎌刃の果たした役割の大きさが見て取れる。多くは原礫面のない石刃を用いたものであり、全体の中で折り取りのない石刃を使ったものは1%程である。代替のきく組み合わせ石器として、規格性の高さが求められた証だろう。鎌刃光沢はほとんど全て



第8図 タル・イ・ジャリ A 遺跡の I 群石器(2)

刃部と平行に付いている。まれに光沢が側縁に対して斜めに付く鎌刃もあるが、これは鎌の柄の端に装着されたと考えられる。同様の例がタル・イ・ムシュキ遺跡でも報告されている(古山 1983)。鎌刃には石刃だけでなくいびつな剥片が用いられることもあり、おそらく、折り取りのない石刃による鎌刃と同じように単体で用いられることもあったのだろう。また、鎌刃光

沢のつく側縁部のほとんどは連続リタッチが施されている。リタッチの上から光沢が付着している場合はリタッチドブレイドを鎌刃として使用したか、鎌刃を途中で刃部再生して再び刈り取りに使用されたものと理解できるが、しばしばリタッチの部分にだけ光沢が見られない鎌刃がある。この場合は、リタッチドブレイドに作り替えられ、他の用途に使用されたとも考えられる。中には、鎌刃から穿孔器に作り替えられたものも存在する。逆に穿孔器の錐部が折れた後に鎌刃に再利用されることもあった。

④截頂石刃 truncated blades (第8図:4)

石刃の片方か両方の端部を急なリタッチで截断しているもの。その端部の形状が凹状、凸状、長軸に対して直交、斜交するものに細分できる。截断されているだけの純粋な截頂石刃は17点のみだが、リタッチドブレイドや鎌刃、穿孔器などに現れた截断は53点を数える。ただし、幾何形細石器の端部に施された明らかに整形目的のリタッチは截断に含めていない。截頂石刃は簡単なエンドスクレーパー(先刃形搔器, end-scrapers on blades)として使えたとも考えられるが、截断だけにむしろあまり意味はなく、ある道具類に施すことで手の保護や、寸法を細かくそろえるための整形を意図したものと推測される。

⑤彫器 burins/gravers (第3図:11, 第8図:5-6)

彫刀面打撃痕が見られる石刃、という程度で分類で、その機能はよくわかっていない。彫刻刀のように使われたと思われる使用痕も見られない。しかし、双面彫器や横型彫刀面上彫器、また抉入部を作って彫刀面打撃を止める例などから、体系的に実行されていた技術であったことは確かである。彫刀面打撃は単刃彫器を作るためだけのものではなく、その証拠に彫刀面打撃が石刃の内側に向かって深く入り込むことでできる内反削片にリタッチを施して製作された穿孔器や、リタッチ入りや鎌刃光沢付きの彫器削片が存在する。単にリタッチドブレイドや鎌刃を彫器に作り替える際に失敗したものとも考えられるが、道具類の刃部再生には連続リタッチの他に彫刀面打撃が併用されていた可能性も高い。

⑥抉入石刃 notched blades (第8図:7)

細かなリタッチで石刃の側縁部に1つか2つの抉りを入れるもの。その抉入部は概して小さなものばかりであり、使用痕も見られないので、おそらくこの部分に道具の機能部としての役割は無かったのであろう。石刃の長軸に平行した彫刀面打撃を任意の点で止めるためのあたりとしてつけられることがあったことを示す例が存在するため、特殊な二次加工を施す途中段階のものであるとも考えることができる。

⑦穿孔器 perforators (第8図:8-10)

他の石刃類より厚みのある石刃を用いて作られる傾向にある。先端の錐部に集中的にリタッチを加えて鋭くとがらせ、石刃の原型を留める不使用部分との間に肩部を作り出すもの(ドリル)と、全体が細長い棒状でほぼ直交リタッチによって両側縁から幅を減じていくもの(ボーラー)とに大別される。前者は小さな孔を開ける、または孔を開け始めるのに使用され、後者は孔を広げるのに使われたのであろう。

⑧内反剥離石刃 plunging blades (第3図:12)

内反剥片と同じように石核調整剥片とも呼べるが、内反した石核底部のみを取り除けば十分道具として使える石刃形をしており、実際リタッチが施されているものも存在するため、道具類のための素材として認識されていたようである。

⑨搔器 scrapers (第8図:13)

大型の剥片から作られる厚みのある搔器と、石刃にリタッチを加えて成形する薄いエンドスクレーパーの2種がある。後者のうち1点は先端に一直線に付いた細かな刃こぼれ状の使用痕から判定した。

⑩ラテラルブレイド lateral blades (第3図:11)

上記トサカ状綾を作るための剥離痕及び石核を調整した時の剥離痕が一方の側縁に見られる石刃。剥離作業面の進行方向で一番端に当たる。この定義でのラテラルブレイドは4点しかないが、前述の背面縦半分が原礫面である石刃類も同じ段階のものと言えよう。見方によっては石核調整剥片ともとれるが、石刃剥離が軌道に乗った後に剥がされるものであるし、道具素材として何ら不足はないので、道具類中に位置付けた。

⑪幾何形細石器 geometric microliths (第8図:11-12)

台形石器が3点、半月形石器が2点の、合わせて5点のみが出土している。幅0.5~1.3cm、長さは1.2~1.5cmとかなり小さく、また点数もわずかである。ここで組み合わせ式の道具として使われていたとは想像できないが、続旧石器時代からの伝統的な石器がその機能は失われても時折作られていたか、もしくは前時代から保持し続けられていたのであろう。

⑫リタッチドフレイク retouched flakes

かなりいびつな剥片にまで部分的にリタッチを施したり、抉入部らしきものを作り出したりしている。系統だった製作ではなく、いわば間に合わせの道具的色彩が強い。

二次加工由来剥片

①彫器削片 burin spalls (第8図:14)

彫刀面打撃によって生じた細長い、あるいは内反剥離をして独特の形状を呈する削片である。連続リタッチが見られる削片は彫刀面打撃が刃部再生に用いられていたことを物語っている。一般には偶然、あるいは失敗の産物とされる内反削片が穿孔器に作り変えられることもある。石刃石器群とはいっても、剥片や削片を最大限利用していたことが窺われる。

(2) II群の石器組成

fの珪質ノジュール②は、灰色、茶色がかった灰色、黄色がかった灰色を呈しており、しばしばこの岩石ができる作用の途中で生じた暗灰色の弧状の筋が花卉状に重なり合っているのが見える。割れ面はざらざらとしていて、直接打撃による剥離方向も不規則である。いかに熟練した石器製作者も石刃製作と同じようにこの石材を制御しながら望みの剥片をとるのは困難であっただろう。II群は全部で121点である(第3表)。

①リタッチドフレイク retouched flakes (第9図:3)

このうち1点は非常に大きく重厚でいびつな斧のような形を呈している(幅5.5cm、長さ9.

第3表 II群の石器組成

	トサカ状 稜付き石刃	石刃	リタッチド ブレイド	リタッチド フレイク	円形 搔器	剥片	総数
原礫面付き	1	5	1	2	1	37	47
原礫面なし		3		2		69	74
総数	1	8	1	4	1	106	121

3cm, 厚さ 3.2cm)。

②円形搔器 round scrapers (第9図:1)

II群中のみならずタル・イ・ジャリ A 遺跡の石器群の中で正に群を抜いて重量のある大型石器である(幅 7.5cm, 長さ 8.7cm, 厚さ 4.1cm)。半周に連続リタッチを施して厚みのある刃縁を作り出している。これを成形するだけでも大量の剥片類が生じたことが想像される。この搔器は目的物としての石核であった可能性も高い。

③トサカ状稜付き石刃 crested blades (第9図:2)

やや大ぶりである。規則的な剥離が困難と考えられる石材ではあるが、この剥片は石核が剥離作業に際して調整されていたことを示している。まったくの無計画な直接打撃による製作によるものとは考えにくい。

④石刃 blades

幅、長さは I 群の石刃類と変わらないのだが、石材の性質からかやや厚みをもつ傾向にある。5 点は原礫面を残している。

⑤リタッチドブレイド retouched blades

わずかに原礫面を残し、片側の一部に連続リタッチが施される。

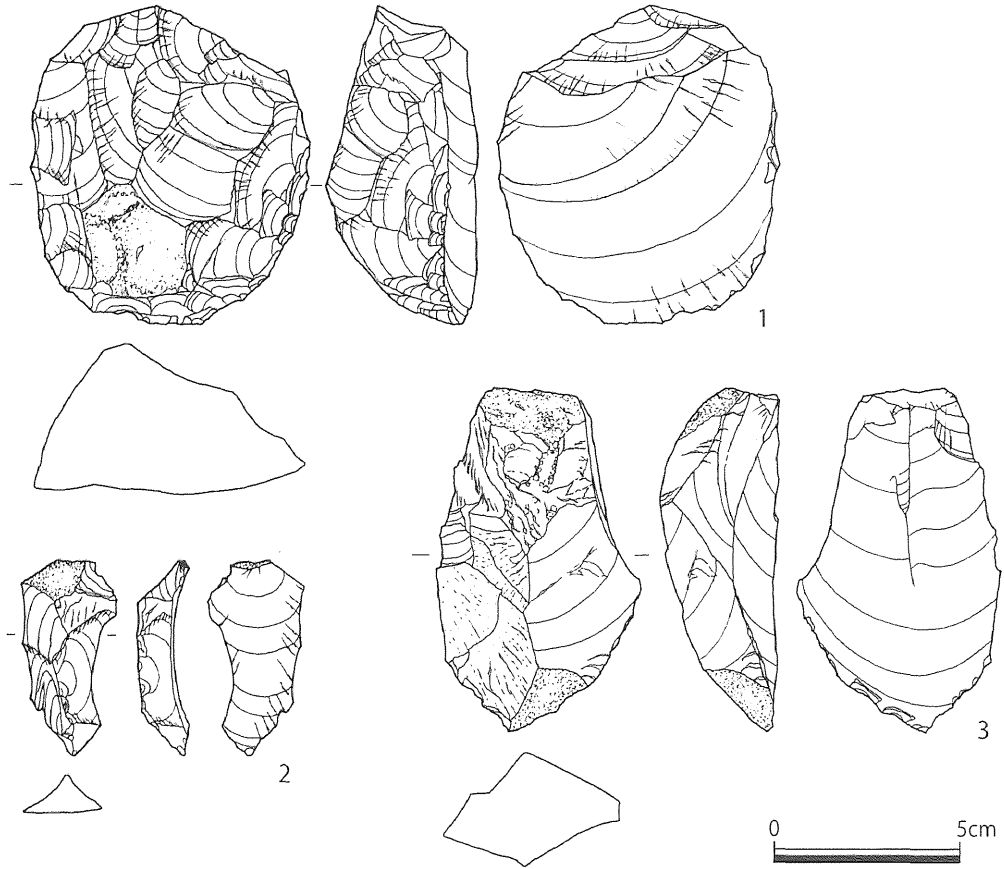
⑥剥片 flakes

30%以上は原礫面のつくものであり、ほとんどが粗割段階の剥片であると言える。

大きなリタッチドフレイクと搔器が圧倒的な存在感を放つ石器群である。石材もその石器組成も明らかに I 群と比べて異質である。ただ、トサカ状稜付き石刃を剥離するという工程は同じであり、何よりもその存在自体が、この遺跡で剥離作業が行われたのはまず間違いないことを示している。しかし石刃石器製作は継続的に行われなかったようである。上記の 2 つの大型道具類を成形したような多方向からの剥離がこの石材を有効活用するには向いていたと言える。このように大きな石器を製作するにあたって 100 点余りの剥片が生じるのはごく自然であるし、また他に石核らしいものが見当たらないので、この II 群は、ある時偶然手に入った 1 つか 2 つの石塊から、普段手に入る石材では到底実現できない大型の道具を製作する過程で一度に産出されたものと想像される。この単なる「粗質石の剥片群」と認識されていた II 群の石器が、マルヴ・ダシュト全体において利用時期が限られていた可能性を持ち、遺跡間の関係性を示唆する重要なヒントを握っているかもしれないことだけは指摘しておきたい。

(3) III群の石器組成

i の黒曜石は全 12 点で、ジャリ A 石器群の約 0.4% を占める。肉眼で判別できる色と質から大きく 3 種類に分けられた。すなわち、透過光で灰色に見えるもの、透過光で緑色に見えるも



第9図 タル・イ・ジャリ A 遺跡のⅡ群石器

の、不透明の漆黒色のものである。黒曜石は色によっておおよその産地を同定することが可能であり、緑色の黒曜石の存在はビンギョル、ネムルート・ダーという緑色の黒曜石産地が立地する東アナトリアと何らかのつながりを持っていたことを指し示している。また、理化学的に証明されているわけではないが、漆黒色の黒曜石はビンギョルのものである可能性が高く、さらにこのⅢ群の黒曜石はよく見ると薄くなった縁辺部が茶色をしており、今後しかるべき理化学分析を行うことにより、ビンギョルに特徴的に産する茶色の黒曜石と関連付けられるであろうと期待される。このような黒曜石の移動の背景としては、タル・イ・ジャリ A の住民が直接東アナトリア方面へ赴いて原産地や原産地近くの集落から獲得した、または東アナトリア方面から交易の波に乗って徐々にザグロス地方に拡散してきたものを獲得したことなどが考えられる。

①石核 cores

単設打面石刃石核：透過光で濁った緑色。背面は平らで半周剥離されている(第10図:1)。

両設打面石刃石核：透過光で灰色。剥離作業面にできたヒンジ・フラクチャー痕を除去する

ために下方から剥離を行う(第10図:2)。

不定形石核:透過光で灰色。石刃か剥片どちらを目的としたものか判別できなかった。

②トサカ状稜付き石刃 *crested blades*

i:透過光で緑色。細かい気泡が見える。石刃剥離面を打面にして横方向の連続剥離を行い、トサカ状稜を作り出すタイプ。石刃剥離作業途中の石核調整剥片(第10図:3)。

ii:透過光で濁った緑色。iと同じく剥離作業途中でトサカ状稜を作る。内反剥片状。

③折り取り石刃 *snapped blades*

i:透過光で緑色。幅広の大きな石刃からとられたものらしい(第10図:5)。

ii:透過光で緑色。

④リタッチドブレイド *retouched blades* (第10図:6)

不透明の漆黒色。表面には気泡と思われる無数の凹凸がある。片側刃部に鱗状剥離痕。

⑤内反剥離石刃 *plunging blades*

透過光で緑色。背面と腹面で剥離痕の方向が異なるため、複設打面石核から剥がされたことが分かる。

⑥穿孔器/搔器 *perforators/scrapers* (第10図:4)

透過光で緑色。概報では3辺に施されたリタッチもしくは使用痕から、搔器のような道具を想像しているが、そのリタッチは穿孔器として使用するための背潰しとも考えられる。

⑦剥片 *flakes*

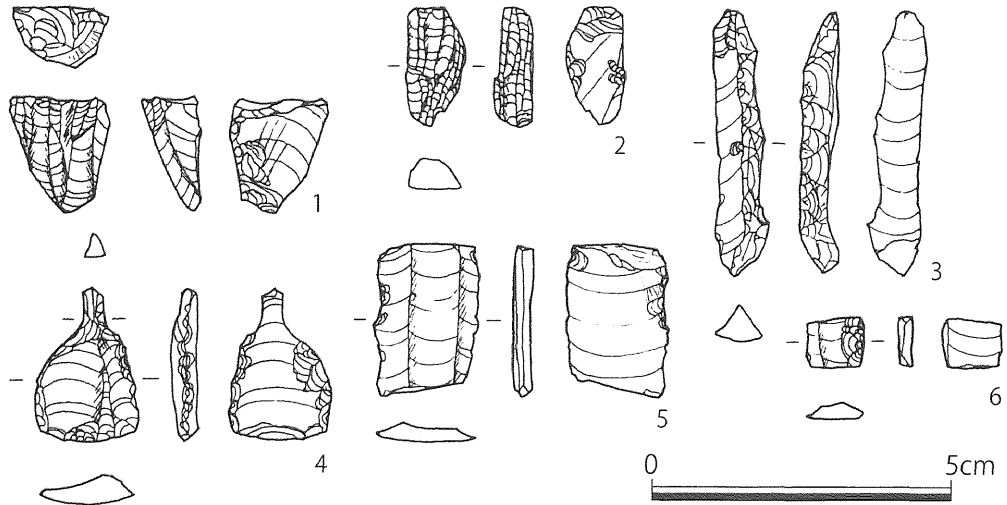
i:不透明の漆黒色。表面に気泡と思われる無数の凹凸があり、原礫面を残す。

ii:透過光で緑色。非常に細かな気泡が見られる。

石核、石核調整剥片、道具類の存在から、黒曜石製石器の製作がこの遺跡で行われたかに見える、また使用されていたことが分かる。遠方からの技術の受容があるかどうか判断できるほど資料は十分でないが、石核の背面を平らなまま残すなど、I群と変わらない石器製作技術も見られる。長さ4.5cmのトサカ状稜付き石刃や幅広の石刃があることから、少なくとも10cm近い大きさの原石を利用して石核が形成され、石刃や剥片が剥離されたはずである。点数があまりにも少ないので群としての傾向を論じるにも極めて薄弱なものとなろうが、灰色の黒曜石製の石核が存在するのに対し、剥片類は見られないこと、反対に漆黒色の黒曜石製の剥片類は存在しても石核が発見されていないこと、白濁した緑色の黒曜石は石核も剥片も存在するが、明らかに気泡が認められるものや透き通った緑色の黒曜石は剥片のみであることは、この遺跡における黒曜石利用が多面的に展開されていたことを窺わせる。存在しないことを根拠にすることは避けたいが、この遺跡に搬入された黒曜石が製品という形で他の遺跡へ再搬出された可能性も考えられる。

3. まとめ

I, II, III群に石材を分けて、石材ごとの石器組成の分析を行った。I群は良質の放散虫チャートと珪質ノジュール①を主な石材とする。岩石としての生成過程は全く異なるが、双方とも珪



第10図 タル・イ・ジャリ A 遺跡のⅢ群石器

質度の高い石材で、石器製作に非常に適している。しかしタル・イ・ジャリ A 遺跡の立地から考えて、すぐ近くで採集できるものではない。チャート産地はこの遺跡から東へ50km程行ったところにあるはずだが、珪質ノジュールは探すこと自体が難しく、この遺跡の北の山間に位置するタンギ・ボラギ周辺の踏査からこの石材はほとんど存在しないことが知られているため、タンギ・ボラギより下流に位置するジャリ A 遺跡などではずっと得難い石材だったと考えられている(久田健一郎氏私信)。それでも良質の珪質ノジュールが様々な道具に用いられているのは、この石材が道具製作に適していることが知られ、獲得に多少の労力が払われていた証である。珪質度の高い石材が好まれた理由は、おそらく押圧剥離によって連続して規格性の高い石刃を剥離することが求められていたからで、事実、一貫して押圧技法による石刃剥離が行われたことを示す砲弾形石核2点は共に放散虫チャート②を素材とし、もう1つの押圧技法による石核は放散虫チャート①を素材としている。しかし押圧技法による石刃類の数に対して押圧技法による剥離痕を残す石核が4点前後というのはあまりにも少ないため、ある一定の長さの石刃が得られなくなった時点で直接打撃による剥片剥離に切り替えられたものと思われる。いびつな錐形をした直接打撃による剥片石核も、ほぼ全て放散虫チャート製である。ここで注意しておかなければならないのは、珪質ノジュール①製の石刃・剥片類の数に比べて、あまりにも石核が少ないということである。珪質ノジュール①は石核も含めて製品の搬入が行われていた可能性も今後検討せねばならない。I群の中のチャート、ノジュール以外の石材、つまり、珪質石灰岩、メノウ、ジャスパーは僅かに石核が存在するが珪質頁岩製の石核はなく、未加工の剥片類も含めて全器種を見ても原礫面を留めているものが少ない。原石、石核、製品の状態で他地域から搬入された可能性もなくはないが、チャート、ノジュールという道具作りに適した石材が比較的容易にまとまった量を手に入れることができた、あるいは製作者によって特に好まれていたために単にその他の石材が石器素材として重要視されていなかったと見ることも

できる。

ちなみに、剥離を容易にする目的での加熱処理はなされなかったようである。表面に熱を受けた証である丸い剥離痕を持っていたり、表面の色が変化していたりする石刃類は数点存在するが、いずれも石器の芯まで熱が伝わっておらず、意図的に加熱されたとは言えない。それらは焚火の近くに遺棄されたものなどだろう。

良質の石材から剥離された石刃は折り取りやりタッチなどを施されて多様な道具類となった。徹底した石材選択と押圧剥離技法の結晶が、組み合わせ道具である鎌刃と言えよう。石刃を折り取って中央部のまっすぐな部位を抽出することも行なわれており、鎌刃として使われなくても組み合わせることができる、代替がきくということが重要視されていたようだ。

Ⅱ群の石材は珪質ノジュールという名を冠しながら、あくまでも肉眼で判別可能な粗質のものだけを集めており、その組成はⅠ群と全く異なっている。押圧剥離どころか直接打撃によっても自由な剥離作業は難しいことが容易に想像される。原礫面付き剥片が多く存在するため、この遺跡で剥離作業が行われていたのはほぼ確実であろう。

Ⅲ群は遺跡間交流や交易を論じる上で重要な黒曜石製石器群である。東アナトリアとの交易を示す緑色の黒曜石が存在することだけでも注目に値するが、この緑色の黒曜石製品の中に石核と、石核調整剥片であるトサカ状稜付き石刃が含まれていることは、タル・イ・ジャリ A 遺跡の性格を明らかにする上で興味深い事実である。ザグロス山脈の東端に位置するこの遺跡に、黒曜石が原石、あるいは石核の状態を持ち込まれ、剥離作業が行われていた。穿孔器か搔器と考えられる道具は、Ⅰ群中のそれとは似つかないものだが、完成品の搬入が行われた可能性も十分あり得る。黒曜石製石器は他遺跡との比較で再び検討する。

Ⅲ. 石器群に基づくマルヴ・ダシュト諸遺跡の比較検討

1. 利用石材の比較

(1) 黒曜石

第4表に示したように、各遺跡間で黒曜石の使用のされ方は異なっていた。注目すべきは、黒曜石製品が12点出土するものの中に石核を含まず、また緑色の黒曜石も見られないと報告されているタル・イ・ムシュキ遺跡、黒曜石製品自体が全く見られないとされるタル・イ・ジャリ B 遺跡、そして緑色の黒曜石製石核を含む黒曜石製品12点が出土するタル・イ・ジャリ A 遺跡である。黒曜石のある／なしで時代差や人間集団の違いまで語ることはできないが、少なくともこの3遺跡の住人たちが有していた情報や知識は異なっていたと言えるのではないだろうか。また、ムシュキ期とジャリ A 期の間で、黒曜石を入手する相手、手段が変化したとも考えられる。ムシュキ遺跡で黒曜石製の石核や石核調整剥片が発見されないのは、完成品が外から搬入されていたためであろう(古山 1983)。代わってジャリ B 遺跡では製作どころか搬入すら行われていなかったことが想像される。一方でジャリ A 遺跡においては、緑色のものも含む黒曜石の原石を入手して、他の石器と変わらない技法を用いて道具類が製作されているのである。興味深いことに、ムシュキ遺跡では黒曜石製の細長い半月形石器が少数出土し、

第4表 黒曜石点数比較

	石器総数	黒曜石数(緑色)	黒曜石石核(緑色)
タル・イ・ムシュキ(K-11)	2951	12(0)	0
クシュケ・ヘザール	50	1(0)	0
タル・イ・ジャリB	1078	0	0
タル・イ・ジャリA	2542	12(8)	3(1)
タル・イ・バクーンB	?	0	0
タル・イ・バクーンA	1445	? \geq 2(? \geq 1)	0

ジャリ A 遺跡でも黒曜石製ではないにしろ細い半月形石器と黒曜石製石器が発見されているのに対し、ジャリ B 遺跡には黒曜石も半月形石器も存在しない。細長い細石刃製の半月形石器は黒曜石交易とともに外から持ち込まれた器形だと主張するには無理があっても、交易で得るものが常に黒曜石のみであったはずはなく、ムシュキ・ジャリ A 集落的性格とジャリ B 集落的性格の相違がさらに示せれば、それは交易活動の有無が大きく影響した結果である可能性が高い。

(2) 珪質ノジュール②

タル・イ・ジャリ A 遺跡についての概報で珪質凝灰岩とされているものは粗質の珪質ノジュールであることはすでに述べた。加えてタル・イ・ジャリ B 石器群で報じられている珪質凝灰岩(Hori 1988-89)と、タル・イ・バクーン(Tall-e Bakun) B 石器群に見られる石灰岩(江上・増田 1962)は、共にジャリ A 遺跡と同じ珪質ノジュール②と考えられることを指摘しておきたい。ジャリ A, B 遺跡は発掘された時期もその主体も同じであり、認識が共有されていたと考えられるからである。バクーン遺跡の石灰岩製石器は、写真(江上・増田 1962; 図版 5: 3-4)から分かるその質感と道具への用いられ方がノジュール②と非常によく似ている。資料を実見していないため詳細は不明であるが、畢竟するにチャートなどの珪質度が高い石材ではなく、粗質でそれも大型の石塊を打ち欠いていびつな道具にするという行動は、ジャリ A 遺跡とバクーン B 遺跡、それから具体的な図示はないが記述からジャリ B 遺跡でも共通している。この石材を大型の石刃と搔器にしているところもジャリ A 遺跡とバクーン B 遺跡に共通である。既に第 1 章で、ジャリ A 遺跡ではこの石材を道具類に加工することがあまりなく、数の面からいえば 9 割近くが未加工の剥片であるが、2 点、大型で重量のある道具類が存在するために、剥片はこの道具類を製作するための剥離作業で生じたものとする考えを述べた。他に考えられる可能性は、ジャリ A 遺跡でこの石材を用いた道具製作が行われており、製品は他遺跡へ搬出されていたというものだが、これでは石核が見つからない理由が説明できない。この問題は今後資料の増加によって解決されるかもしれない。ところで、珪質ノジュール②、もしくは粗質の大きな石塊を用いた道具類の有無でマルヴ・ダシュトの石器群を分類すると、興味深い傾向が見て取れる。第 2 図のおおよその比較年代を適用して、以下のようにまとめた(第 5 表)。

この石材、あるいは石材利用が一時期しか存在しないと仮定すれば、上記のグループ分けはそのまま大まかな編年案として適用できると言えよう。大型の搔器や大型の石刃類が存在する意味を、皮なめしや屠殺用具の本格的な出現と見るならば、この時期の動物利用に関する傾向

第5表 石材利用を反映した比較年代

6000BC	～		4000BC
ノジュール②/大型石器 無	有		無
ムシュキ クシュケ・ヘザール			
	ジャリ A3	ジャリ A2 ジャリ A1	
		ジャリ B	
		バクーン B1	バクーン B2
			バクーン A...

と変化がそれに沿う形で立証されているかどうかは大変重要になってくる。重量石器は土掘り具とも考えられるが、繰り返し衝撃を受けたような使用痕は観察されなかった。

2. 石器形態の比較

(1) 石核

定形的な石刃石核が報告されていないクシュケ・ヘザール(Kushk-e Hezar)遺跡は除外するとして、その他5遺跡で一般的なのは単設打面を持つ角錐形～砲弾形の石核である。角錐形のものしばしば剥離を錐面の半周に留めており、その場合の剥離が施されない背面は直截の打ち割り面か、平らに近い原礫面であることが多い。タル・イ・ムシュキ遺跡でもタル・イ・ジャリ A 遺跡でも背面と底部に原礫面を残す石核が存在するため、石刃剥離は原石の大きさ、形を最大限活かして行われていたことが分かる。また、打面が円状の典型的な砲弾形石核が報告されているのもムシュキ遺跡とジャリ A 遺跡のみである。

(2) 幾何学形石器

幾何学形石器の形態は各遺跡の特徴を最も端的に表す要素の1つである。マルヴ・ダシュトの各遺跡には幅数 mm から 1cm, 長さ 1cm 以上の細石刃で作ったものと、通常の石刃で作ったもの双方が存在するが、ここではまとめて幾何学形石器と呼称する。ムシュキ遺跡にもジャリ A 遺跡にも細石刃製の細長い半月形石器が存在するが、タル・イ・ジャリ B 遺跡には幅広で短寸の台形石器しか見られない(第6表)。本稿の執筆中に、元国立科学博物館の小田幸子によって数十年前にジャリ A 遺跡で表採された石器 60 点余りを目にする機会に巡り合わせた。このコレクション中にも細石刃製と思われる細身の台形石器 1 点が含まれていた。しかしタル・イ・バクーン B 遺跡からは幾何学形石器が報告されていない。全く出土しなかったのなら、この地域、少なくとも既出の6遺跡における幾何学形石器の利用はジャリ A 遺跡で終息したことになる。確かに、出土数は半月形 2 点、台形 3 点とほぼ消えかかりそうな状況であり、とても積極的に使用されていた道具とは言い難い。それに比べて半月形と台形にそれぞれ細身、幅広というバリエーションがあり、合わせて 4 タイプを有するムシュキ遺跡、幅広の台形を選択的に製作していたと思われるジャリ B 遺跡では間違いなく実用に使われていたはずである。ただ、その重要性を認識していたからと言ってこの2遺跡が生活文化の根源を等しくする集団の初期集落、後期集落と結論づけることはできない。時代の推移による減少を示すという主張は、ムシュキ遺跡の幾何学形石器中 8 割以上を占める半月形がジャリ B の時期になって姿を

消し、台形に取って代わられる理由が付されなければ、無責任なものとなってしまう。ムシュキ遺跡の幾何学形石器を分析した安倍は、使用痕から幅広のものは「直剪鏃」として矢柄の先端に装着され、細身のものは「直剪鏃」の他に刺突の効果をより増幅させる「カエリ」としても装着されたと推定し、ジャリ B 遺跡でこれらが減少、単純化するのには狩猟の重要性が減退したことによって引き起こされたものと結論している(安倍 2007)。ムシュキ遺跡と比較した際の時代的な狩猟の衰退と幾何学形石器の減少はジャリ A、B 両遺跡に当てはまることであり、幾何学形石器の形態を取り上げれば、同系統の集団如何を疑うべきはやはりムシュキ遺跡とジャリ A 遺跡ではないだろうか。ジャリ A 遺跡の幾何学形石器は点数が少ないのでこれ以上の議論はできないが、幾何学形石器の製作法、用途、あるいはこの器種を伝えた他地域の集団について多少の情報を共有していた可能性は否めない。さらに先の大型石器が動物利用に深く関係しているのではないかという推論と合わせてみると、ジャリ A 遺跡はジャリ B 遺跡と同様、農耕狩猟経済から脱却し始めた時期の遺跡であると言える。

(3) 搔器

ムシュキ遺跡とジャリ B 遺跡を中心にマルヴ・ダシュトの動物遺存体を研究したマシュクールらは、ムシュキ遺跡では大型のウシ、ウマ、ガゼルが主な主要食肉源でヒツジの骨がほとんど存在しないのに対し、ジャリ B 遺跡、ジャリ A 遺跡、バクーン A 遺跡ではウシとガゼルが減少してヒツジ、ヤギが大半を占めるようになると論じている(マシュクールほか 2007)。このように狩猟経済から牧畜経済への転換が動物相の変化という視点から示されている通り、ムシュキ期からジャリ B、ジャリ A、バクーン期にかけて狩猟具の幾何学形石器が激減、消滅するという事実は生業の変化を示唆するものである。こうした流れを踏まえて再び各遺跡の石器群を眺めてみると、搔器の大型化という傾向が認められる。ムシュキ遺跡では石刃の先端を刃部とするエンドスクレーパーと小型の円形搔器が主流であるが、ジャリ B 遺跡では石刃製のエンドスクレーパーが小形化すると共に円形搔器がやや大きく肉厚になり、また半急角度のリタッチが施された不定形の大型剥片類も同じような用途に使用されていたと考えられる。ジャリ A 遺跡ではさらにエンドスクレーパーが規格統一されたものではなく、半円刃を持つ厚みのある搔器と珪質ノジュール②を素材とする非常に大型の円形搔器が出現する。この珪質ノジュール②製の大型搔器は第 2 項でも述べた通り、バクーン B 遺跡にも存在するものである。大型の搔器が野生動物を利用していた時期には必要とされず、家畜利用の際に欠かせないものとなるという必然性は全くないが、こうした事実がある以上動物利用に付随する道具類の認識に関して何らかの変化があったものと思われる。

(4) 鎌刃

狩猟か牧畜のどちらが盛行していたかにせよ、農耕が重要な生業であることに変わりはない。各遺跡間の鎌刃は、農耕に資する道具への考え方に若干の相違があったことを反映している。まずムシュキ遺跡の鎌刃であるが、リタッチによって鋸歯状の刃部を作るものは存在しない。報告書の表 10 によると、石刃 1401 点中約 6.8%に当たる 95 点が光沢をもった鎌刃である(深井ほか 1973)。クシュケ・ヘザール遺跡出土の鎌刃光沢を持つ例 1 点はエンドスクレーパー

に転用されており、刃部腹面の光沢は背面からのリタッチで除かれている。ジャリ B 遺跡の鎌刃は不連続の使用痕のようなものが付いていることはあるが、連続リタッチを施されることは少なかったようである。報告書で典型的な鎌刃の分類とされているものは 65 点で、石刃類の約 10% を占める計算であ

第 6 表 各遺跡間の幾何学形石器点数比較

	幾何学形石器		総数
	半月形	台形	
タル・イ・ムシュキ(K-11)	59	12	71
タル・イ・ジャリB	0	10	10
タル・イ・ジャリA	2	3	5

る(Hori 1988-89)。そしてジャリ A 遺跡においては、鎌刃は石刃類の 15% 以上に当たる 207 点存在し、そのうち約 63% は片側縁か両側縁に連続リタッチが施されている。バクーン B 遺跡では図示されたものが 4 点のみで特に説明もないため、詳しい所は分からないが、そのわずかな例はリタッチを施されているようである。バクーン A 遺跡はアリザデの報告書に掲載されている石刃 28 点中 16 点がリタッチと光沢を同時に持っていると説明されている。このことから、ムシュキ遺跡とジャリ A 遺跡間に明らかな相違を見て取れると言つてよいだろう。単純に出土数と石刃類に占める割合は大きな差があり、決定的なのはリタッチの状況である。リタッチは、鎌刃の刃部再生、他の道具への作り変えを示している。ムシュキ遺跡とジャリ A 遺跡の時期間に鋸歯縁状刃部を持つ鎌刃が出現したことは人間集団の違い、もしくは各時代ごとの農耕技術の差どちらを反映しているのか、慎重に考える必要がある。

(5) 穿孔器

ムシュキ遺跡には刃部にのみリタッチを施して層のできるドリルと、ドリルよりも細かなリタッチで石刃のほぼ全周にリタッチをくわえて三角形に成形するボーラーの 2 種が存在する(深井ほか 1973)。クシュケ・ヘザール遺跡で発見された 1 点は、剥片の元の形を利用した雑なものである(Alden et al. 2004)。ジャリ B 遺跡には全周にリタッチを加えているボーラーのようなものはなく、すべて短い刃部を作り出すためだけにリタッチが施される。初めから尖った形状の石刃や剥片を素材にして簡単にリタッチを加えたものを使用している例もあるため、あまり時間をかけて製作することはなかったようである。代わってジャリ A 遺跡にはボーラーとドリル 2 種に加えて、彫刀面打撃でできた削片を利用するものや、彫刀面打撃によって刃部を作り出すものも存在することはムシュキ遺跡、ジャリ B 遺跡と一線を画す特徴であると言えよう。ボーラーもムシュキ遺跡のものより急角度をなすリタッチで大きく石刃の幅を減じることが多く、その場合三角形というより柳葉状を呈する。穿孔と拡孔の両機能を併せ持っていたことが想像される。日本隊の報告書の図から、バクーン A, B 両遺跡にも三角形のボーラーが存在することが分かる(江上・増田 1962 : Fig. 20-21)。刃部を集中的に作り出すドリルタイプが存在しないのだとしたら、ジャリ B 遺跡とは対極の傾向を示していることになる。石刃の全周にリタッチを加えて穿孔器を形成する習慣の有無によれば、ムシュキ遺跡、ジャリ A 遺跡、バクーングループとジャリ B 遺跡とに分けられるが、その結論は、さらなる資料数の増加を待ってから再検討したい。

(6) 彫器

ムシュキ遺跡の石器群に対する最終的な結論の中で、この遺跡には彫器が存在しないと指摘

されている(古山 1983)。ジャリ B 遺跡で彫器と呼ばれている 1 点も偶発的なものと考えられる。再びジャリ A 遺跡の特異性を論じることになるが、ジャリ A 遺跡には彫器が 21 点存在する。彫器というのは機能からつけられた名ではないため、ここで言う所の彫器とは二次加工として彫刀面打撃のみが見られる石刃のことであるが、他の道具類で刃部を作るためや刃部再生のために彫刀面打撃が加えられているものも合わせれば 50 点に上る。少なくとも本稿で取り上げてきたマルヴ・ダシュト 6 遺跡において、彫刀面打撃法はジャリ A 遺跡で採用され始めたか、ここでの利用に限られていたことが窺われる。

3. その他

新石器時代の農耕と強く結びついた鎌刃の相違は注目されるが、それらを鎌の柄に装着する際に重要になってくる接着剤も興味深い事実を示している。ムシュキ遺跡には天然アスファルト(ピチュメン)が存在せず、植物性の接着剤が使われていたであろうこと(深井ほか 1973)、またジャリ B 遺跡にも天然アスファルトが存在せず、蜜蝋などの有機接着剤が用いられていたであろうことが各分析者によって想定されているが(Hori 1988-89 など)、ジャリ A 遺跡には 1 点のみ天然アスファルトの付着した鎌刃の例が報告されている(Egami et al. 1977)。ジャリ A 集落に天然アスファルトをもたらした取引相手は湾岸地域である可能性が高い。ムシュキ遺跡でもジャリ A 遺跡でも海の貝製ビーズが出土しており、バクーン B 遺跡ではタカラ貝製のビーズが出土しているため、前々からペルシャ湾地方との交易関係は想定されていた(江上・増田 1962, 深井ほか 1973, Egami et al. 1977)。これらの遺跡の中でも、ジャリ A 遺跡は緑色の黒曜石といい天然アスファルトといい、他地域と活発な交易をおこなっていたことが推定される。これと対照をなすのがジャリ B 遺跡で、ここには黒曜石も報告されておらず、簡単な出土遺物紹介でも海の貝製品が見つかったという記述はない(堀・前田 1984)。石器群が独特の様相を呈することもあり、アナトリア方面とも湾岸方面ともつながりのない、閉じた社会を連想させる。

IV. マルヴ・ダシュトにおける新石器文化への考察

タル・イ・ジャリ A 遺跡を中心に、マルヴ・ダシュトに存する新石器遺跡の石器群を通してその特徴を論じてきた。結果、各遺跡に時代の差と思われる相違は認められるものの、土器編年が主張する各遺跡間の類似、差異を裏付ける確固たる証左を得ることはできなかった。

ジャリ A 遺跡石器群の主な特徴として、緑色の黒曜石を有すること、珪質ノジュール②を大型の搔器と石刃に加工して使用していること、鎌刃に連続リタッチを施す傾向にあること、彫刀面打撃法を採用していること、そして道具類間の転用が目立つことの 5 つが挙げられる。連続リタッチと彫刀面打撃は刃部再生のためのものと考えられ、1 つの石器の再利用、または他の道具への作り替えが盛んであることは、いびつな剥片石核が多数存在し、石器群全体があまり精緻な剥離作業によるものではないことと相俟って、一見石器の持つ重要性の低ささえ感じさせる。しかし、徹底した石材の選択と、石材に適した技法の利用による道具製作は、この

遺跡の住人達が効率良く石器製作と石器利用を行うようになったことを示すものであろう。それに対して、ムシュキ遺跡の石器群は、「きわめて細石器的」と表現されるように(西秋 2006)、非常に念入りな製作活動が展開されていたものと思われる。また、鎌刃は連続リタッチが施されることもなく、彫刀面打撃法の採用も認められない。これを刃部再生による道具の再利用や転用といった発想の欠如ととらえるならば、ムシュキ社会は定住・農耕牧畜社会よりも時間と手間をかけて石器群を準備することに吝かでなかったのだろう。ただし、ムシュキ遺跡の幾何学形石器を分析した安倍は、そのうち 14 点に鎌刃光沢が見られるため、直剪鎌として利用されたあと集落に持ち帰られて再利用されたものと論じている(安倍 2007)。「農耕狩猟社会」と「農耕牧畜社会」という視点によれば、幾何学形石器と搔器の多寡に基づき、ムシュキ遺跡と他 5 遺跡という対比が可能であるが、石核、穿孔器、幾何学形石器の形態と黒曜石の多寡に基づけばムシュキ遺跡とジャリ A 遺跡の石器利用における共通性の高さ、つまり文化的なつながりの強さが反映されている可能性も指摘できる。ジャリ A 遺跡に特有の緑色の黒曜石と天然アスファルトは交易圏の拡大によってもたらされたものであるし、おそらくは彫刀面打撃法もタル・イ・ジャリ B 期とジャリ A 期の間に他地域との情報交換により得られた技術であろう。このことは、時代の差によって説明がつくので、ムシュキ遺跡とジャリ A 遺跡が根幹の文化を等しくするのではないかという推測を不可能にするものではない。タル・イ・バクーン遺跡は資料が僅少であるにもかかわらず、その石器組成は特にバクーン B 遺跡においてジャリ A 遺跡と類似することを予見させる。しかしジャリ B 遺跡は、幾何学形石器や穿孔器の形態と、黒曜石や天然アスファルトが存在しないかに見える事実から、ムシュキ遺跡ともジャリ A 遺跡とも類似性が感じられない。隣接するこれらの遺跡と情報交換なしに動物の家畜化が起こったというのは不自然であるため、何らかの見落としがあるのだろうが、現時点での管見によればジャリ B 遺跡はある種独立した石器群を持つ居住地であったと結論付けられよう。ジャリ A 社会は同じく農耕牧畜を行いつつ、広範な交易圏から多様な情報や物品を得ていたために、ジャリ B 社会と様相を異にする文化を構築し、それが石器群に表れたものと考えられる。ジャリ A 遺跡の第 1 層から発見されたスタンプ印章は、バクーン遺跡で言われているような初期都市的集落の、さらに前段階にジャリ A 遺跡が位置していたことを示すものではないだろうか。

V. おわりに

イラン新石器時代の研究は活発化しているにも関わらず、土器研究と比べ、概して石器は簡単な報告で済まされる傾向にある。新しい遺跡の発見や過去の発掘の再調査が行われつつある現在、石器の報告を疎かにするのはこの分野の研究全体にとって不利益と言わねばならない。

また、石器分析自体もさらに改良の余地がある。本稿では理化学的根拠が全体として乏しく、顕微鏡による使用痕分析も全く行っていない。その点を克服し、さらに他遺跡の石器群についても同様の分析が加えられれば、新たな見解も生まれてこよう。同じ新石器時代のシリアを扱った近年の研究では、一つの石器群中に在地系、非在地系の石材から製作された、それぞれが異質の技術伝統を示す石器が含まれており、その出現の頻度が時代を通して変化することで他

地域との接触の濃淡を反映していると考えられるという報告がなされている(Nishiaki 2007 など)。今回のタル・イ・ジャリ A 遺跡の石器群の再観察において、層ごとの分類を行わなかったために使われた石材の時代ごとの変遷を追えない結果となってしまったが、石材は黒曜石のように他地域から搬入、または居住地からやや離れた場所から獲得された可能性があることも念頭に置いて現地での原石のサンプリング等の基礎的調査を行うことが必要であろう。

現在マルヴ・ダシュトにおいてはタル・イ・ムシュキ遺跡に先行する新石器時代遺跡は発見されておらず、先土器新石器時代遺跡が存在するかどうか不明な結論がでていない。ザグロス山脈東端の地で、どのようにして新石器化が起こったのか、各遺跡の人間集団はその過程の中でどのような役割を演じていたのか、そうした問題に様々な分野から迫る研究者は大勢いるが(Abdi et al. 2003, Alden et al. 2004, Alizadeh et al. 2006 など)、石器研究にもそういった視点からより詳細な検討が行われていくことが望まれる。

謝辞

本稿は2008年度筑波大学第一学群人文学類に提出した卒業論文の内容を大幅に削り、修正を加えて論文にしたものである。指導教官である常木晃先生と三宅裕先生、そして国士舘大学の沼克彦先生からは本卒業研究に関して様々なご教示、ご助言を頂いた。また、石材の地質学的な視点による分析については筑波大学生命環境科学研究科の久田健一郎先生、石器の分析、記述についてはマンチェスター大学(当時)の前田修氏のご協力なくしては行い得なかった。水戸市教育委員会の川口武彦氏からも有益なご指摘を多数受けた。皆様に末筆ながら深く感謝を申し上げます。

註

- 1) 放散虫などの珪質生物遺骸が堆積してできた岩石。主成分は二酸化珪素(SiO₂)。
- 2) ノジュールとは、堆積物中の、まわりより硬いしばしば扁平の球状炭酸塩や黄鉄鉱、シリカ、あるいは二酸化マンガン塊のことで、堆積作用と同時にその後で形成される(堆積学研究会編 1998)。従って固有の岩石を指し示す名称ではないが、チャートや泥岩といった堆積岩ではないことを明示するため便宜的に珪質という語を付したノジュールと呼ぶ。

引用・参考文献

- Abdi, K., Pollock, S. and R. Bembeck 2003 Fars archaeology project 2003: Excavations at Toll-e Bashi. *Iran*. 41, pp. 339-344.
- Alden, J., Abdi, K., Azadi, A., Biglari, F. and S. Heydari 2004 Kushk-e Hezar: A Mushki/Jari period site in the Kur river basin, Fars Iran. *Iran*. 42, pp. 25-45.
- Alizadeh, A., Kimiaie, M., Mashkour, M. and N. Miller 2006 *The Origins of State Organizations in Prehistoric Highland Fars, Southern Iran Excavations at Tall-e Bakun*. Oriental institute publications 128, Chicago.
- Arimura, M. 2003 Chipped stone artifacts. In T. Iwasaki. and A. Tsuneki (eds.) *Archaeology of the Rouj basin: A Regional Study of the Transition from Village to City in Northwest Syria I*. Al-Shark 2, Ibaraki, University of Tsukuba, pp. 57-97.
- Beale, T. W. 1973 Early trade in highland Iran: A view from a source area. *World Archaeology*. 5-2, pp. 133-148.

- Bernbeck, R., Fazali, H. and S. Pollock 2005 Life in a fifth-millennium BCE village excavations at Rahmatabad, Iran. *Near Eastern Archaeology*, 68-3, pp. 93-105.
- Bezić, A. 2007 Distribution of flint in Turkey, from 10,000 to 6,000 cal BC. Case study –Çatalhöyük. In Delage, C. (ed.) *Chert Availability and Prehistoric Exploitation in the Near East*. BAR International Series 1615, Oxford, pp. 68-86.
- Chataigner, C., Poidevin, J. L. and N. O. Arnaud 1998 Turkish occurrences of obsidian and use by prehistoric peoples in the Near East from 14,000 to 6,000 BP. *Journal of Volcanology and Geothermal Research*, 85, pp. 517-537.
- Egami, N., Masuda, S. and T. Gotoh 1977 Tal-I Jarri A: a preliminary report of the excavations in Marv Dasht, 1961 and 1971. *Orient*, 13, pp. 1-15.
- Flannery, K. V. 2002 The origins of the village revisited: from nuclear to extended households. *American Antiquity*, 67-3, pp. 417-433.
- Fornaseri, M., Malpieri, L., Palmieri, A. M. and A. Taddeucci 1975-77 analyses of obsidians from Late Chalcolithic levels of Arslantepe (Malatya). *Paléorient*, 3, pp. 231-246.
- Ghirshman, R. 1938 *Fouilles de Stalk près de Kashan 1933, 1934, 1937*, 1. Série Archéologique Tom. 1, Département des Antiquités Orientales, Musée du Louvre.
- Henry, D. O. 1974 The utilization of the microburin technique in the Levant. *Paléorient*, 2, pp. 389-398.
- Hisada, K., Ito, H. and Y. Kamata 2008 Geological prospect for source rocks of prehistoric raw materials in the Bolaghi and Arsanjan areas. In A. Tsuneki and M. Zeidi (eds.) *Tang-e Bolaghi: The Iran-Japan Archaeological Project for the Sivand Dam Salvage Area*. Al-shark 3, Ibaraki, University of Tsukuba, pp. 31-40.
- Hori, A. 1988-89 Chipped stone artifacts from Tape Djari B, Iran. *Bulletin of the Ancient Orient Museum*, 10, pp. 21-46.
- Maeda, O. 2002 A large obsidian core from Tell el-Kerkh, northwest Syria. *Neo-Lithics*, 2-02, pp. 1-3.
- Maeda, O. 2007 Meanings of obsidian exchange and obsidian use at Akarçay Tepe. *Technical Systems and Near Eastern PPN Communities*. Antibes, pp. 245-254.
- Nishiaki, Y. 1997 Neolithic sickle elements from the Balikh valley, north Syria. *Al-Rāfidān*, 18, pp. 59-67.
- Nishiaki, Y. 2007 Patterns of flint exploitation and use at the Neolithic settlement of Tell Seker Al-Aheimar, northeast Syria. In C. Delage (ed.) *Chert Availability and Prehistoric Exploitation in the Near East*. BAR International Series 1615, Oxford, pp. 87-103.
- Olszewski, D. I. 1996 The lithic transition to the Early Neolithic in the Zagros region: Zarzian and M'lefatian industries. *Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environment*, 3, Berlin, ex oriente, pp. 183-191.
- Olszewski, D. I. 2001 My 'Backed and Truncated Bladelet', your 'Point': terminology and interpretation in Levantine Epipaleolithic assemblages. *Beyond Tools*. Berlin, ex oriente, pp. 303-318.
- Ohnuma, K. 1997 Chronology of the "Proto-Neolithic" of Iraq and Syria -a hypothetical view-. *Al-Rāfidān*, 18, pp. 45-57.
- Ohnuma, K. 2008 Lithic assemblages from TB75 and TB130. In A. Tsuneki and M. Zeidi (eds.) *Tang-e Bolaghi: The Iran-Japan Archaeological Project for the Sivand Dam Salvage Area*. Al-shark 3, Ibaraki, University of Tsukuba, pp. 87-119.
- Renfrew, C., Dixon, J. E. and J. R. Cann 1966 Obsidian and early cultural contact in the Near East. *Proceedings of the*

- Prehistoric Society*. 32, pp. 30-72.
- Renfrew, C., Dixon, J. E. and J. R. Cann 1968 Further analysis of Near Eastern obsidians. *Proceedings of the Prehistoric Society*. 34, pp. 319-331.
- Vanden Berghe, L. 1952. Archaeologische opzoekingen in de Marv Dasht Vlake (Iran). *Jaarbericht Ex Orient Lux*. 12, pp. 211-220.
- Weeks, L., Alizadeh, K., Niakan, L., Almdari, K., Zeidi, M., Khosrowzadeh, A. and B. McCall 2006 The Neolithic settlement of highland SW Iran: new evidence from the Mamasani district. *Iran*. 44, pp. 1-31.
- Wilke, P. J. 1996 Bullet-shaped microblade core of the Near Eastern Neolithic: experimented replicative studies. *Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence and Environment*. 3, Berlin, ex oriente, pp. 289-309.
- 有村 誠 1998 「レヴァント地方新石器時代における石器製作活動の検討」『筑波大学先史学・考古学研究』第9号 1-33頁.
- 安倍雅史 2007 「イラン、タル・イ・ムシュキ遺跡出土の幾何学形石器の研究」『オリエント』第50巻第1号 156-172頁.
- 江上波夫・増田精一 1962 『マルヴ・ダシュトⅠ：タル・イ・バクーンの発掘 1956』 東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書 第2号 山川出版社.
- 大沼克彦 2002 『文化としての石器づくり』 学生社.
- 大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保訳 1998 『石器研究入門』 クバプロ《Inizan, M. -L., Roche, H. and J. Tixier 1992 Technology of Knapped Stone. Meudon, C.R.E.P.》
- 旧石器文化談話会編 2000 『旧石器考古学辞典』 学生社.
- 堆積学研究会編 1998 『堆積学辞典』 朝倉書店.
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』 言叢社.
- 常木 晃 1995 「西アジア型農耕文化の誕生」梅原猛・安田喜憲編『農耕と文明』 朝倉書店 127-142頁.
- 西秋良宏 2003 『東京大学総合研究博物館 考古美術(西アジア)部門所蔵考古学資料目録第6部イラン、マルヴ・ダシュト平原の先史土器』 東京大学総合研究博物館標本資料報告 第51号 東京大学総合研究博物館.
- 西秋良宏 2006 「ムシュキとジャリ -イラン南西部マルヴ・ダシュト平原の新石器化に関する諸問題-」『生業の考古学』同成社 292-305頁.
- 深井晋司・堀内清治・松谷敏雄編 1973 『マルヴ・ダシュトⅢ：タル・イ・ムシュキの発掘 1965』 東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書 第14号 東京大学東洋文化研究所.
- 藤井純夫 1983 「鎌刃の装着法分類」『古代オリエント博物館紀要』第5号 129-152頁.
- 藤本 強 1982 「レヴァントの細石器 -その起源と展開, 技術・機能論を中心にして-」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第1号 1-20頁.
- 藤本 強 1992 「細石器(Ⅱ) -幾何学形細石器の分類とその歩み-」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第11号 125-150頁.
- 古山 学 1983 「タル・イ・ムシュキ遺跡の石器組成」『古代オリエント博物館紀要』第5号 109-128頁.
- 堀 暁・前田昭代 1984 「マルヴ・ダシュト平原の先史文化」『オリエント』第27巻第1号 54-75頁.
- 保柳康一・公文富士夫・松田博貴 2004 『堆積物と堆積岩』 共立出版株式会社.
- 前田 修 2000 「西アジア先史時代の黒曜石交易と石器制作活動」『筑波大学先史学・考古学研究』 第11号 1-24頁.
- マシュケール, M.・ヴィーユ, J.-D.・西秋良宏(有松 唯訳) 2007 「西アジアにおける動物の家畜化と

イラン、マルヴ・ダシュトにおける新石器文化の様相

- その発展」『遺丘と女神 —メソポタミア原始農村の黎明—』東京大学総合研究博物館 80-93 頁。
増田精一 1977 『タペ・サンギチャハマック —イラン先史遺跡調査総括外報—』
望月明彦 1981 「近東の黒曜石遺物の化学分析 (1)」『古代オリエント博物館紀要』第3号 83-99 頁。

**The lithic assemblage at Tall-e Jari A:
a Neolithic site in Marv-Dasht, southern Iran**

NAKAMURA, Maiko

Tall-e Jari A is a Pottery Neolithic site located in Marv-Dasht in the Fars district in the South Zagros of Iran. In 1961 and 1971 Japanese expeditions carried out excavations at the site. The focus of this research is the analysis of the lithics obtained from these expeditions, which excavated more than 2,500 pieces.

Nine different kinds of stones were exploited as raw materials at Jari A, and they can be roughly divided into three main groups; group I (radiolarian chert, silicious nodule, silicious shale, silicious limestone, agate and jasper), group II (coarse silicious nodule) and group III (obsidian).

Where manufacturing techniques are concerned, there is no significant technical difference within the groups I. However, the residents of this settlement obviously preferred and used radiolarian chert and silicious nodule. The existence of cores and cortical tools shows that lithic production was practiced at the site. Moreover, the usage of burin-blow technique which have not previously been recorded in Tall-e Mushki and Tall-e Jari B was observed. Group II items consist of a big blade, a massive scraper and irregular-shaped flakes. Although there is yet some question as to whether the artifacts in this group resulted from a systematic production process, the presence of many discarded flakes with cortical surface shows that they were at least produced at this site. On the other hand, the form of cores and core trimming pieces made of green or opaque black obsidian which originates in southeast Anatolia resembles those of the group I, however the form of a scraper and a perforator do not resemble those of the group I.

The general characteristics of these assemblages are represented by many retouched sickle blades which were used for harvesting and a few large scrapers and tools for slaughter, as well as a few geometric microliths as hunting tools. Based on the analysis of these lithics this paper will present two conclusions: 1) Jari A people exploited raw materials of good quality and imported obsidian cores, then knapped them at the site, and 2) their subsistence economy depended on the farming of plants and animals.